

案内絵ハガキから見た貴重書展示会のイメージ（12）

「日仏交流 150 周年記念稀覯書展示会： フランス人による日本論の源流をたどって」

廣島 ひとみ

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。これからの大学生活、思う存分楽しんですごしてください。

皆さんは、本学が行っている貴重書の展示については知っているでしょうか。今回、私が紹介したいのは2008年に行われた日仏交流150周年記念展示会での貴重書です。この展示会は、今からちょうど150年前の1858（安政五）年に江戸幕府とフランスとの間で修好通商条約が結ばれ、両国の正式な外交関係が始まった記念として開催されたものです。

まず初めに紹介したいのは、マルコ・ポーロが著した『東方見聞録』です。この本の名前は皆さんもよくご存知のことと思います。

『東方見聞録』を著したマルコ・ポーロ（1254-1324）は1270年（または1271年）に商人であった父の二度目の大旅行に加わり、ヴェネツィアから海路アークルへ、以後陸路をイラン高原、パミール高原、甘肅から内蒙古の元の首都カンバルクに達し、皇帝フビライ・ハーンに仕えて重用されました。その間、皇帝使節として中国各地に赴き、通算17年間を中国で送りました。1292年にマルコ一行はフビライのもとを辞去し、船で福建からペルシア湾に向かい、1295年に25年ぶりでヴェネツィアの土を踏みました。

ヴェネツィアに帰ったマルコは商人として活躍しましたが、ジェノヴァとの海戦で捕虜となり、獄中で物語作者ルスティケッロの助けを得て東方での見聞談を纏めたのが本書の祖本で、日本が初めてヨーロッパで紹介された書物と言われています。本書は1556年にパリで出版されたフランス語版で、日本を「黄金の国」と記述しています。

この見聞談はマルコの生存中から珍奇な「作り話」であるといわれ、学問的価値は与えられていませんでしたが、フビライ治下の元朝の内情や産物・動植物・風俗・地理等についての記



述は客観性に富んでおり、時代を経るにつれて学問的にも評価されるようになりました。

『東方見聞録』が翻訳されて16世紀半ばには既にフランス語版が出版されていたということは驚くべき事です。フビライは日本に入貢を求めましたが、鎌倉幕府に拒否されて、1274年（文永の役）と1281年（弘安の役）の二度に亘って日本を襲撃しました。元寇という日本史上の大事件に登場するフビライに仕えたマルコが、ここで日本についての知識を得、ヨーロッパに戻ってから「黄金の国、ジパング」として紹介しました。日本、アジア、ヨーロッパと別々の時間と空間で生起していた事件が、世界の歴史という一本の大きな奔流に結びつけられて現在に到っている——この本からそのような感動を憶えました。

皆さんも、こうした貴重書を一度覗きに展示会に来て、感動を味わってみませんか。

ひろしま ひとみ（2011年度英米語学科卒業生）